村上忠順翁顕彰会報

尾張大野城［信長の妹・市の三女・江（ごう）の最初の夫である佐治一成の居城］

撮影：甲村正貴　2021/10/16 常滑市城山公園にて

★　目　次　★

■　会長の言葉　地域と言葉を愛した忠順翁　P.2

■　故郷のために、次につなげていくもの　P.3

■　村上忠順翁の歩んだ道から学ぶ　P.3

■　一口香の常滑市大野町を訪ねて　P.4-5

■　村上忠順の逸文の遺稿「笹栗」　P.5-6

■　令和三年度活動報告　P.6

■　第十六回「忠順大賞」入賞作品　P.7-8

村上忠順翁顕彰会報　第 33 号

編集　村上忠順翁顕彰会事務局

発行　　令和 4 年 3 月 31 日

地域と言葉を愛した忠順翁

村上忠順翁顕彰会
会長　近藤　光良

正月に昭和十八年に発行された『蓬蘆歌選』を読んでいましたら、村上忠順翁がこんな短歌を詠んでいました。「我が宿は三河の碧海堤村つゝまはずして安くこそ住め」（私の家は三河の堤村ですが、気を使うことなく安らかに暮らしていますよ）という故郷をたたえた歌がありました。堤村があったからこそ忠順翁が育まれたことを感じさせる歌です。また、詩人長田弘の著書『なつかしい時間』（岩波新書）の中にこんな文がありました。

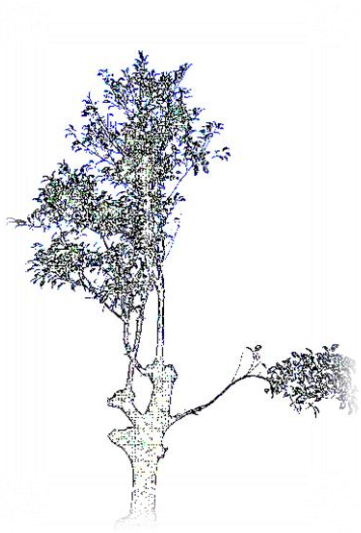
「…言葉を使い捨てることは心を使い捨てることです。…物は豊富になったけれども、逆に語彙が乏しくなった。」これを読んだ時思ったのは、まさに忠順翁は短歌を詠みながら言葉を大切にしたかった人なのだろう、同時に人と地域を大切にした人なのだろうと。

話は変わりますが、昨年の大河ドラマ「晴天を衝け」は幕末から昭和まで活躍した巨人渋沢栄一を描いた物語でした。村上忠順翁も彼と同時代を生きてきました。多分、村上忠順翁も渋沢栄一の噂は知っていたと思いますが、渋沢の事は残念ながらどこにも出てきません。恐らく関心の対象が違っていたのかもしれません。しかし、同じ時代の空気を吸って活動していたことは確かです。こうした村上忠順翁の軌跡を辿ることは、大河ドラマ同様の興味ある活動であると感じています。

私たち村上忠順顕翁彰会は、大河ドラマを見るような楽しい活動となることを期待しているのですが、実態はなかなかそうではありません。会員の高齢化と会員数の減少や、事務局の高齢化など抱えている問題は多々あります。しかし、渋沢栄一が苦難を乗り越えたように、私達たちも一歩一歩課題を解決し、村上忠順翁の偉業の周知と彼を育んだ地域風土の誇りを再認識する活動を展開することが大切であると感じています。

昨年、ある地区で文化祭において村上忠順翁についてのコーナーを設けていただき、ビデオとともに地域の方に知っていただく機会を設けていただきました。このように地域の皆様に村上忠順翁の活躍を身近に感じていただくことが大切であると感じました。小学校では読み聞かせの時間に村上忠順翁の話を朗読していただくことも実施していただきました。また、村上忠順翁の親しんだ短歌を楽しむ教室も久米翠雲先生のご協力により交流館で開催いたしました。

令和４年度を迎えるにあたり、地域が育んだ著名人としての村上忠順翁を、より身近に感じていただくための活動を展開していきたいと感じています。手始めに、昨年同様小学校での読み聞かせの継続、地域の文化祭への協賛、また、村上忠順翁が勉強した千巻舎の公開と活用、事務局員の村上忠順翁に関する知識の向上等を行うとともに、顕彰会の活動を広く知っていただくためのホームページの公開を目指してまいりたいと思います。つきましては、今年度も会員の皆様のご支援・ご協力を切にお願い申し上げます。



故郷のために、次につなげていくもの

衆議員議員
八木哲也

昨年、村上忠順の千巻舎（ちまきのや）を見学した。約二万五千冊の書籍が眠っていたと思うと、古書のにおいがまだ充満しているように思え、博学ぶりが窺い知れた。刈谷藩の御典医の子供とは言え、幼少から漢詩、四書五経を読み、絵画を習い、和歌や古事記などにも精通したようです。十七歳の時に渡辺綱光に和歌を学ぶと、あります。渡辺綱光は小生の故郷寺部の殿様です。村上忠順と和歌を通じて繋がっていると思うと、それだけで、何か近いものを感じます。

村上忠順を知るうえで大切なことは、七十七種三百七十八巻に及ぶ著書を残したことだと思います。顕彰会の皆さんがこれらを紐解き研究されることが、村上忠順をさらに後世に伝えていくことになると思います。

そして村上忠順の愛した和歌を通じて、地域の皆さんが和歌を嗜みあう風土になれば、素晴らしい故郷になるはずです。顕彰会が募集している小、中学生の短歌を読み、きらりと光る素晴らしい感性に脱帽することがあります。

こういう故郷の財産をしっかり次の世代に繋げていただくことを切に願っています。

†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡

村上忠順翁の歩んだ道から学ぶ

豊田市議会議員
石川　嘉仁

新型コロナウイルス感染症は、二年以上にわたって人々の生活や子どもたちの学び、地域行事などあらゆる分野に影響を与え、警戒が必要な状態が続いています。このような状況ではありますが、世界の流れとしてはワクチン接種や経口薬により将来に向かって乗り越えつつあり、日本においても発生当初より日本人ならではの国民性により影響を最小限に抑えているのではと感じています。

ところで、日本人として忘れてはならない国民性とは何か。私は、その答えは先人たちの考え、歩んできた道を学ぶことから得られるものであると感じます。郷土の偉人として村上忠順翁が残した書物、軌跡を通して、大切なものは何かを感じる事ができ、多くの気づきを与えてくれます。この先コロナ禍から回復したとき、地域の繋がりが強固なものとなり、郷土愛溢れる地域となっていくためには、忠順翁顕彰会の様々な活動が大切となってきます。

顕彰会の活動も総会や歴史探訪など多くの行事が中止となりましたが、小中学校向けに「忠順さん物語」を発行し、「忠順大賞」や「みんなで楽しむ短歌づくり」などを実施してきました。四年度は　村上忠順翁の偉業をＰＲし、更なる顕彰会活動の周知を図るために、ホームページを作成していく予定と伺いました。忠順さんが詠んだ五万首を超える和歌や『古事記標柱』を、顕彰会活動を通じて会員や地域の皆様に多くのことを感じて頂きたいと思います。最後に、顕彰会活動に携わってこられた全ての方、会員の皆様に感謝を申し上げ、本会が益々発展されることをお祈り致します。

†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡

一口香の常滑市大野町を訪ねて

甲村　正貴

令和三年十月秋晴れの一日、会長と事務局三名で大野町を訪ねました。

会長の運転、およそ一時間のドライブで大野町に到着。現地では大野コミュニティのメンバーである郷土史研究家の千賀哲郎氏が、駐車場で出迎えてくれました。

早速、古民家を改装した「大野町きょう屋」というカフェに案内いただき、千賀氏より〝大野町の歴史〟について以下のような内容の興味深い講義をしていただきました。

一、大野は海運の町、そして東西行路の要所

二、大野と織田信長の関わり

三、大野城と佐治家、その後織田有楽斎（うらくさい）長益（ながます）の居城へ

四、家康の危機を三度救った町

五、佐治与九郎とお江（ごう）の結婚と離縁

当時の人・物の流通は、道路が十分に整備されていない陸路よりも海路の方が早くて安全と言われていたこともあり、大野町は関西・関東を結ぶ要所に位置していたことにより、海運で大きな発展を遂げてきました。

そして、戦国時代から日本の歴史にも色々な関わりを持ち続けてきたことが分かりました。

千賀氏の先祖は知多半島の海運を取仕切る廻船総庄屋を務めてきた家系であるとのこと。代々実家に伝わる古文書の解読・解析・調査を通じて、自身のルーツと地域の歴史を明らかにされています。

とても興味深い講義内容で、また改めて聞く機会があればと思いました。

講義の後、地元の食材を使った美味しい幕の内弁当をいただき、そして当日行われていた大野町散策イベントである「お城散策ツアー」に参加して、大野城まで約二キロをボランティアガイドさんの案内で散策しました。

街を歩いていると、栄えていた頃の面影が随所に見られます。かつて、家康が泊まったといわれる大野御殿跡の敷地に年数を経た銀杏の巨木があったり、卯建のある町並みがあったり。

途中斎年寺の国宝雪舟筆になる「慧可断碑図」の見学が予定されていたが、お寺で法事が行われていたため見学することは出来ませんでした。（本堂にあるのは精巧な複製で、本物は京都国立博物館に寄託されている由）

大野城には武将の衣装を着けたボランティアガイドがいて、見学者の質問に丁寧に説明をしていただきました。

どのようにして知識を得られているのですかとの質問には、地域で勉強会が開催されておりこれに参加していること、最近は歴史に詳しい見学者も多く、そういう人の質問にも対応出来るよう個別に勉強をしているとのことでした。

千賀氏、それぞれのガイドさんなど皆さんが地元の歴史に精通されており、地元への強い誇り、愛着を持っていること、またそれを人々に伝承してゆこうという熱意が言葉の端々から感じられました。

城跡に建つ展望台からは、西に銀色に輝く伊勢湾、その中を名古屋港に向かう大型コンテナ船南にはセントレア空港の建物、更に北には大草城跡が見られ、大野町の位置するところを良く把握することができました。

「一口香」については、忠順さんが遣い

物にされていたという記述が『座右記』に出てくる江戸時代から大野町で製造・販売されてきた銘菓ですが、つい最近お店が廃業されてしまったとのことです。大野町で一口香を賞味しようという目的がかなわず残念!!

後日、会長が長崎から取り寄せた「一口香」（大野町のものよりもひと回り大ぶり）を役員の皆様と賞味しました。さてその味は……。興味のある方はお試しください！

†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡

村上忠順の逸文の遺稿「笹栗」

中澤伸弘

忠順歿後十七年を経過した明治三十四年九月、橘道守が主宰する椎本吟社から刊行されてゐた月刊の和歌雑誌「明治謌林」（百四十四号）巻頭に「評論」として忠順の歌評「笹栗」が掲載された。「笹栗」はその後百四十八号まで五回に亘り連載された。これは今後も続く予定でゐたのであらうが、主宰者道守の死によつて、「明治謌林」がこの号で終刊となつたため中途で打ち切りとなつた。忠順の歿後に随分と時間が経過して、何故ここに掲載されたのかは不明であるが、これは忠順の遺稿であるし、また途中までなので逸文（不完全な文）なのであらう。道守と交流のあつた忠浄がこの遺稿を渡したのか、道守の手許にこの原稿があつたのか定かではない。忠順の著作として紹介されるのは今回が初めてではなからうか。

忠順は天保十二年頃に、江戸の橘守部に入門したことを嘗て証明したが、守部歿後はその子冬照とも繋がり、冬照歿後は妻東世子とも親しい関係であつた。そのことも嘗て詳記したことがある。道守はこの冬照・東世子の養子として迎へられ、文久三年の冬照歿後に十二歳で家督を相続した。維新後、母東世子を扶けつつ、歌道の面で椎本吟社を興し、祖父守部の学統を継いだのである。椎本吟社の活動は守部の著書の継続的な刊行と、全国歌人を対象とする歌集の編纂刊行であつた。また通学や通信による和歌の稽古、添削指導などにも積極的に取り組み、また毎月十二日には兼題による歌会指導もあつた。更に全国歌人に呼びかけて『明治歌集』初編を明治八年十一月に刊行した。これは明治三十二年の九編まで木版で刊行された。その間明治十五年には母東世子が逝いてゐる。忠順の歌はこの『明治歌集』の初編から見え、七編には序文を書いてゐる。

この一方で道守は明治十三年に月刊の和歌雑誌「同詠共撰歌集」を創刊した。これは同盟会員が出詠し、その互選により高得点を得た歌を『明治歌集』に載せると言ふ性格のものであつた。その他にも明治二十年からは『新年勅題詠進歌集』（明治三十二年、十三集まで）、『明治歌友肖像千人一首』（三編まで）など多くの歌集を世に送つた。

この「同詠共撰歌集」は明治二十二年に誌名を「明治謌林」と改め、継続して月毎に刊行された。明治三十年に今後を嘱望してゐた長男茂丸が二十八歳の若さで逝いたが、翌年には「明治謌林」の百号が出てゐる。その後三十四年の十月に、道守が胃病のため鎌倉に転地養生し、その編輯は門人の尾上真路らが当つたが、三十五年一月の百四十八号で終刊になつた。道守はその四月に五十一歳で逝いた。父母の守部顕彰の遺志を継ぎつつあつた道守にはさぞや無念のことであつたと思はれる。その後椎本吟社の活動は終焉を迎へるが、徳川時代の流れを汲む旧派の歌の一つの流れをまさに道守がその活動を通して支へてゐたと言へるのである。

「笹栗」は各号ほんの数頁づつ五回に亘り部分的に掲載された評論であり、歌や歌語についての先人の考へに自分の考へを評したものである。

第一回は「あしびきの山鳥の尾のしだりをの」の歌の「ながながし」の語句をめぐり、香川景樹、荒木田久守、山本昌敷が各々論じた一文（出典なし）を引き、それに自分の考へを忠順云として書いたもので「何々し何」の用法は勅撰の歌集にもあるもので批判の対象にならないと述べてゐる。第二回は「田子の浦ゆ打ち出でてみれば」の歌の「ゆ」につき、同様に香川景樹、荒木田久守、山本昌敷が各々論じた一文を引き、また忠順云としてこの「ゆ」は「に」に通ふことが常に多いと証してゐる。

第三回目は「用ゐる」と書く仮名遣についてのことで、「用ゆ」とヤ行に取り間違へる人があるが、正しくは「用ゐる」と書くべきであると結論付けてゐる。第四回は更にその続きで平安期以降に「用ふ」とハ行に書く例があることを挙げ、これが誤用であることを論じてゐる。このことは忠順の独自の考へではなく、既に論証されてゐることであるが、なほ間違へることが多かつたのであらう。第五回はこれに関連したもので、「餅」を「もちゐ」と書くことを正しいとするのである。『新撰字鏡』の「黍」に「もちひ」とあり、餅と同様のものであるとの考へにより、「餅」の仮名を「もちひ」であるとすることを「黍はもちきびの誤」であり、この「び」が「み」と通じるのであつて「きび」＝「きみ」でもあると言ふのであつた。要するに「餅」は「もちゐ」で「黍」は「もちきび」で別の仮名遣であることを諸書を引いて結論づけるのである。「び」「み」の通音については「我三河の國にてもキミと云ふ所とキビと云ふ所ありて一やうならず　かゝれば古へもしかありけむ」と述べてゐる。

表題に「笹栗」とあつてこれは忠順の名付けか、はた道守によるものかは不明だが、本文中にこの「笹栗」なる語についての考証があるのであらう。活字になつた本文はここまでであり、以下がどのやうなものであつたかはわからないままである。なほ村田春海に同名の新古今集の和歌の注釈があるやうだが、これも内容は不明である。（原文のまま）

†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡†‡

令和三年度活動報告

※新型コロナウイル感染拡大防止徹底のため以下三つの行事を中止しました。

○【中止】四月十九日　定例総会
　総会議案書を作成し役員の書面審議による議決

○【中止】七月一日　女性部研修会

○【中止】十月二十九日　歴史探訪

○七月二十二日　第一回役員会実施

○四方樹大学
・十月一日　・十一月五日
・十二月三日　・一月七日
受講者延べ六十二名

✶講師　名古屋大学　大学院教授
塩村　耕先生
✶講義内容
忠順翁の『座右記』

○十一月二十三日
忠順翁命日墓参と
第二回役員会実施
『短歌教室』開講が
提案され採用決定

○十二月十二日
新行事『みんなで
楽しむ短歌づくり』
受講者十九名

＊講師　久米 翠雲 先生
（忠順大賞選者）

第十六回「忠順大賞」入賞作品

応募総数　一六八八首
久米翠雲先生　選評

○ 小学生の部

豊田市長賞
堤小　二年四組　足立　蓮音

おじいちゃんギターをひい
ぼくピアニカ
またやろうね大すきコ、

※音楽好きなおじいちゃ
コンビを組んで演奏す
楽しいですね。下の句

豊田市議会議長賞
堤小　六年四組　中

お父さん画面ごしでは会
やっぱり一緒にすごしたい

※お父さんは単身赴任？遠いところだと行き来も出来ない。このコロナ禍では直接会うことも出来ない。下の句に中村君の思いが、ぐっと迫ってくる。

「みんなで楽しむ短歌づくり」教室風景

豊田市教育委員会賞
駒場小二年三組　水元　惺介

クリスマスクッキー作り兄弟で
サンタさんへのぎゃくプレゼント

※サンタさんがプレゼントをくれた。お返しをしよう。お姉さんとクッキー作りをしてお返しをした。第五句が楽しい。サンタさんも喜んでいるね。

中日新聞社賞
堤小　三年二組　菅原　月光

ボロボロな毎日使ったスパイクで
けったボールゴールの中へ

※すごいね！三年生でスパイクがボロボロになるまで、練習したんだ。大会でゴールが決まった時はうれしかったね。これからもがんばれ！。

会長賞　金賞
駒場小六年一組　神谷　実花

あたたかい空気生み出すどんど焼き
炎を見ながらおもちを食べる

※秋葉神社の祭礼の一環として行われるどんど焼き。もうほとんどの地域で無くなっている。懐かしいですね。顔をほてらせながら、餅を食べる。

会長賞　銀賞
駒場小四年二組　鈴木　爽太

マラソンで母のおうえんさけび声
ちょっぴりてれるでもうれしいな

※我が子が懸命に走る。必死に応援する母の叫び声が聞こえた。下の句で、鈴木君の思いが充分表現されています。照れちゃうんだよね。でも…！

会長賞　銅賞
駒場小二年三組　花井　栞梛

ならいごとまい日ダンスたのしいな
おんがくなれば体もうごく

※本当に心からダンスが好きなんだ！毎日練習してきたんだね。楽しくて仕方がないというようすがよく分かる。これからも楽しんでください。

○ 中学・一般の部

豊田市長賞
駒場町　　清水　宣子

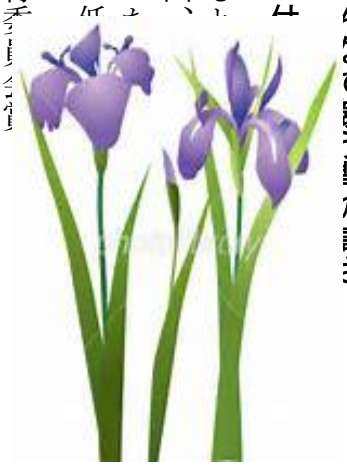
振り回し冷たくなったタオル巻き
秋の種蒔く畑耕す

※暑い日、秋蒔きの準備、畑を耕す。濡らしたタオルも熱くなる。また水に濡らし、振り回して首に巻く。頑張っておられる様子が浮かびます。

豊田市議会議長賞
前林中二年六組　　清水　優太

帰省してみんなで競う背の高さ
しるしに付

※帰省する声。毎回、また伸びんは背が低



豊田市教育委

前林中三年五組　　伊藤　琉那

思い知る当たり前だった日常が
今となっては貴重な一日

※コロナ禍でもう二年。運動もおしゃべりも勉強も制限される。何でもできる日常がこんなにも貴重と思い知らされる。初句の倒置法がいいですね。

中日新聞社賞
前林中一年二組　　鈴木　悠斗

初めての美容室に行き髪を切る
友に褒められ照れた想い出

※今までは理容室で髪を切っていたが、中学に入って初めての美容室。教室に入るのが恥ずかしかったが、友に誉められ照れた。下の句―素直でいい。

会長賞　金賞
前林中二年二組　　嵯峨　知芭

冬休み猫とこたつでまったりと
のんびり過ごすいやしの時間

※猫はこたつで丸くなる。部活も休み。今日はゆっくりかわいい猫とたわむれる。いやしの時間。「まったり」の表現が短歌の情感を豊かにしている

会長賞　銀賞
前林中一年五組　　川合　玲菜

初対面マスクのせいで顔見えず
マスクの下の笑顔も見たい

※中学入学当初からマスク生活。初対面の同級生、先輩たちマスクでは笑顔がはっきり見えない。マスクなしで大口開けて笑う笑顔が見たいね。

会長賞　銅賞
前林町　　小島よし子

小春日にコスモス揺れる
休耕田（やすみだ）へ

遠回りして夫(つま)と語らう

※小春日に夫と連れ立って、用事を済ませた。「暖かで気持ちがいいから、コスモス畑を見て（あとがき）こう！」遠回りだったが…。下の句がいいですね。

活動報告で紹介した『短歌教室』に参加。（※先生が言われる四つ注、それならばと、やってみる、なるほど無理、できそうな感覚に、）

紙面の都合上、部の作品のみの紹介です。全体は別紙の「第十六回忠順大賞」をご覧下さい。

少しだけ敷居が下がった様な錯覚に載せられ、二首目に挑戦してみる。ここからが難しい、言葉遊びの蟻地獄から抜けられず、似通った短歌に自己嫌悪。来年はどうする？

（事務局　寺田）